千載和歌　末

へ 4
4717
1

敷島のみちハやまとの神代よりはじまりて人のこゝろを
のことばとなりて文字の始まりける。それより後延喜の
みかどの御時に古今集をえらばせ給ひ。天暦のみかどの御時に
後撰集をあつめさせ給ひ白河の院の御代には拾遺を勅せられ。堀川の
先帝は此の道をそのまゝしろしめしけり。このみちをさかんに世
の風俗ならびにこれをこのみてわたくしにも家々の集を[illegible]
るぢ[illegible]ハかはりてめでたき[illegible]。[illegible]がりければ
世にもてはやされ。諸国にさかんなる人々ハたかきもいやしきも
この道をよろこび[illegible]和泉式部ハかゝる山の[illegible]
教大師ハ秋の川松のことばをのこせり。世の[illegible]
みちをはじめてよみつらねやおほくして集をえらびてかなしきを[illegible]
またになりけり
我家世と[illegible]なりこゝろにかなひてよろこびけるもの
そのうちのもとの[illegible]世のいとなみにおそろしく
さみだれ[illegible]やまの山の[illegible]すこしは。
あとよりのちのよのまこと川世[illegible]しもこゝろにかなふ

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

4717
1

かきこれぞしゆく世々にみちくらわゆりみちくりれを萩ようなりけ
つまにきつかはまひさ御かゆくこと。秋津しまのわかゆれわらびも
ろさかれめくこぞうれ菊の花よりもかはちらくらむ道流れゆく海
ゆりぞよくこぞ浪みなみでひまでごとにかまし折よりのぞこうれ。
むすのいくさぞくぐさね情あかりし。春の花のにほひ。秋の月のゆふべかか
りひとのべこころをとうごころさしれにたかにとれし。おもふ時にはいと作のこゑ
さるべきことの心わりよしれは風まのくりうこし此宮にとぶさとわくれぞふ
さらし海のみちもおもうりにあまりて心のいつこいかへらりしもなく。
すぐのえやしもりにけりも薄しらにいさわ世の中とらのむ
さもかくぬとのことをもころうつめぐりれらにのあらりにたけしう。
人のおもふをもみかかざらむこと、はりそは拾遺集にえらびいれ
後さまとうつ青しつこ正暦のころをひよりこのかた文治のいまに
いたるまでのあまりし字とよひそゆうべき作をえらむ
わかりのうたよの時よりこのくさのいさきの花わまりに都のび世に
とくさわゆりが世よるむ数よきのたるかしかくしも年ひさしく。
いはゆるさりしあかりにらはしくしあかし集とむのなまして千載和
歌集といふなのは拾遺集のくれがなしく。勅撰よりかひとつへてそ
へくらぶろ金葉詞花のふたつの集あり。それらしも歌勢ひろく
え歌の数もくなくして、あまりこ前わかりし。そのうち今の世までの
方とぞりえし家のし。撰らの家にたとえまらぶるこよとはなよ。
かゝる国のれのひろきにふこのたえしてまうひで志の蘭らしの
花の梅の花御のりをぞふらうわしなおし浪あくうえのうへくらわゆり。
あしもでのぞらとをごぞつぞよかくかすゞぞでにまうせくいひつる
ねうがしひかるがゆへにそれみそりじあかりひのにとをたにのち作れ
つらりの八雲八てのの所と志のこ寄せのくみことのさうひなよ。
そりすぢにあかりこのことかりへられるべしわまでも海とにされど
いかるくもおかげにはいふくらきれはの事のく家れにられるむけら。
しれ名前の山まかは木ぬかふしさの色くゐらりのことかりへま
どの山の井れどに名をとらへつかつ。難波江のあしのかりねさて
あらとはかぐくるむわりきれどかはそらのもむなぞしとわかまでぞわ
はき流とすやさばかんかぶわにかうしれま来のいかりれとのたと
もがへるにうつくさうにさうへぞうとでのし流ともれし。勤志ぞぞ

こぬこと花あまりぬるにあつまりといへり。勅をうけたまはる
徳からりて。集をえらびしめしは、その德なかくおもふはこ
ゝの志あるゆゑなり。これへいはうらをまつるは、ほかにもあれ
かしがたく。はづかしめさぐるの中にこそのがれがたくの旅よりつゝまれ
あらずな。これをえらばざれはわらうなりけれど。伊勢山の集を撰ばれ
いにしへの人をわざからさのみとのりとうけて。やまとうたの言の
はじまりおこりてをれつくりし集をえらへしのこしかれ、わとくにはいりて今
このおほくのよにありて和歌の浦の名をさすことひろく。あさくそこにけれ共
ちとせをまたざるをそれぞ。われはいづれはへてまつりてはみちにたらひ
まりにきれば。家々のことの葉浦々のもしかはまさに川にかさねつゝ
さかんことのりをうけたまはりつゝ。この集をつくりのたびにこたへし
かきあつめまこ。行末の松の風ひさしくつたはりまつる。ましはしまの
あさなゆく志かしてらくがずれ春秋を送りつつはてしれか。つゆもとう
こそはゆや。文治みつの年なが月の中ばのころほひにえらびたてまつれは
しるしてまつりぬるになんありける

千載和歌集巻第一

春哥上

としあらたまりける日読侍りける

春のくるあしたのはらをみわたせばかすみもけふぞたちはじめける　源俊頼朝臣

堀川院御時百首哥たてまつりける時よめる

みむろ山谷にや春のたちぬらん雪のした水いはたゝく也　中納言国信

百首哥たてまつりける時春の心をよめる

雪ふかき岩のかけ道あとたゆるよし野の里も春はきにけり　待賢門院堀川

堀川院御時百首の哥たてまつりける時残雪をよめる

道たゆといとひしものを山里に消ゆるはをしきこぞの雪かな　前中納言匡房

承暦二年内裏後番歌合に鶯をよめる

春くれば雪のわかれをかけて若鶯いまぞ鳴くなる　藤原家経朝臣

後冷泉院御時皇后宮の哥合によみ侍りける

山里の垣ねに春やしるからんかすまぬさきに鶯ぞなく　大納言隆国

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時

十二月の前に春立侍りけるによめる
氷りし室の戸しまをあけて猶よ中ぬるみ宮の霞めるかな 源俊頼朝臣
右大臣に侍りける時家に歌合し侍りけるに霞の歌とて
よみ侍りける
霞しく春のしほちを見わたせはみとりをわくる沖つしら浪 按察使公通
堀川院の御時百首の歌の内霞の歌とてよめる
わきもこか袖ふる山も春きてそ霞の衣たちはしめける 前中納言匡房
霞の歌とてよめる
春くれは杉のしるしもみえぬかな霞そたつる三輪の山もと 刑部卿範兼
見わたせはそことしるしの杉もなし霞やこめし三輪の山本 右大将家 隆房
百首の歌奉りける時子日の心をよめる
とかへりの松や春をしるらん子日をいふにまかせれく 待賢門院堀川
中宮に侍りける正月七日前中宮の女房わかなと
つかはしけるをとてつかはしける
うら山の雪の下草かきわけて誰をとふひのわかなつむらん 治部卿通俊
堀川院の御時百首の歌奉りける時若菜の歌とて詠る

春日野の雪をわかなにつみそへて今日さへ袖のしほれぬるかな 源俊頼朝臣
正月の廿日比雪のふりて侍りける朝に家の梅をおりて
ともよりの朝臣につかはしけれは
咲そむる梅の立枝にふる雪のかさなる数をとへとおりへ
なし 権中納言俊忠
梅かえにふりてかさなるとしらせてや人のまちらなん 源俊頼朝臣
梅の木に雪のふりかかりけるをよめる
梅かえにふりつむ雪はひととせにふたたひさける花かとそみる 左京大夫顕輔
永保二年二月后の宮にて梅花久薫といふ心をよみ侍ける
わか宿の春は梅の花咲く風やのとけかるらん 大納言経信
堀川院の御時百首の歌奉りける時梅花の歌とてよめる
今よりは梅咲やとは心せむまたぬにきたる人もありけり 大納言師頼
かかりひとそてよそにうつる梅花たれもみぬ春のよの月 前中納言匡房
崇徳院に百首の歌奉りける時よみ侍りける
梅の花折てかさしにさしつれは袖につもれる雪かとそみる
香しらす 大炊御門右大臣

梅かゝにおとろかれつゝ春の夜のやみこそ人ハあくかれしけれ　和泉式部

さよふけて風や吹らん花の香のにほふ心ちのそらにする哉　藤原道信朝臣

春の夜ハ軒はの梅をもる月の光もかほる心ちこそすれ　皇太后宮大夫俊成

百首の歌めしける時梅の歌とてよませ給ひける

春の夜ハ吹まふ風のうつりかを木ことに梅と思ひけるかな　崇徳院御製

梅花遠薫といへる心をよめる

梅かゝハをのか垣ねをあくかれてまやのあまりにひまもとむ也　俊恵法師

題しらず

梅かえにをりせハ袖のにほひけりゆかしくもあるかものゝと　大江匡房

梅かえの花よりうつる香のあまり春のをる袖にしむ心ち哉　二条太皇太后宮

風吹ハ枝そのきしをきこそ春の吹にかのかきの香そ　後徳大寺左大臣家

中院よりきこえし紅梅のおもしろかりけれはかくさんとさせ給ひける

又の年の二月ハかり花ほそきの枝をつけて皇太后宮大夫

左大臣家の人々につかはし侍りける

ひとしれぬ君の梅の花まつらんと思ひける　大納言定房

堀川院の御時百首の歌奉りけるとき春雨をよめる

よしの山よその春霞たちぬるハかそへいつとや花のまつらん　前中納言匡房

春雨のふりそめしより青柳のいとのみとりそ色まさりける　藤原基俊

題しらす

つれつれと浪の糸よるとも春のやなきハ人のこゝろを　和泉式部

堀川院の御時百首の歌のうち早蕨をよめる

君か山まのきのしたにある蕨さかりのしけき春の人もなし　藤原基俊

崇徳院に百首の歌奉りける時春駒の歌とてよめる

みこもりに芦の若葉やもえぬらん玉江の沼をあさる春駒　藤原清輔朝臣

堀川院の御時百首の歌の中に帰雁の歌とてよめる

春くれハたのむの雁もいまハとてかへる雲路に思ひたつなり　源俊頼朝臣

帰雁の心をよみ侍りける

故郷へハ霞かゝれる浮雲とひとつに鳴なる雁かね　左近中将良経

天の原ひとつらなるかりかねの雁の涙をさけてもなくなる雁かね　源三位頼政

帰る雁いく雲井ともしらなくにこゝろはかりそさきたちにける　祝部成仲

崇徳院に百首の歌奉りける時春の歌とてよめる

春の夜ハ花のにほひもさそひきてしかはかすむの月　藤原季通朝臣

百首の歌奉りける時春の歌とてよませ給うける　崇徳院御製
朝夕に花待つころは思ひ寝の夢の中にぞ咲きはじめける
よそにては花咲きぬとや見えつらん雲より上の山へいるかな　待賢門院堀川
白川院花の後しにおはしましける時まゐりてよみ
てよみ侍りける
山桜咲きぬよりはさそはれぬ風のこころのわくかたぞなき　京極前太政大臣
鳥羽院位おりさせ給ひて後白川に御幸ありて
花御覧じける日よみ侍りける
今日さへや花の陰にてながめけん白川の水　花園左大臣
万世の花のためしやのこるらん白川の春もかかる御幸は　徳大寺左大臣
法勝寺に御幸せさせ給ひける日山花といふこと
をよませ給ひける　崇徳院御製
咲きにほふ花のさかりはかはらねどたえせぬ春の山風
ちるさとはいそぐも花のなごりにて花の名こそ惜しけれ　法性寺入道前太政大臣
寛治八年さきのおほきおほいまうちぎみの高陽院の家の
歌合に桜の歌とて

山桜をりかへりぬる春霞風とこそしもよそに見えけれ　中納言女王
花ゆゑにしらぬ山へはなけれども心は春のならひなりけり　源俊頼朝臣
京極前関白家にて十種供養し侍りける時白川院御幸
ありて又の日花の歌奉りけるによみ侍りける
桜花をりてぞ君にまかせつる散らさで風にまかせてぞ見む　京極前関白家肥後
花ちらばあらし山べとうつろひにけり春はさくらの日数なりけれ　後二条関白内大臣
咲きにほふ花のあたりは春ながらたえぬ雪の心地こそすれ　藤原基忠
雨中見花といへる心をよみ侍りける
雨そそく桜はわきて花の色もまさるばかりに日数経ぬらし　中院右大臣
東山に花見侍りける日よみ侍りける
ありとてもしらぬなかやとはかなくも花咲く世をもちらぬ世は　八条太政大臣
百首の歌よませ侍りける時花の歌とて
みる人の心ぞうつる桜花いくへともなき色の深さは　前参議教長
崇徳院に百首の歌奉りける時花の歌とてよめる
ここやたのをれ山の桜花雲井のよそにみてやすぎなん　左京大夫顕輔
山ざくら匂ひをさそふ春風はいつもこころのあらしなりけり　藤原清輔

神垣乃三室の山ハ春きてそ花のしらゆふかけてみえける　藤原清輔朝臣

遠思山花といへるこゝろを

諸共に花の白雲とのみやみねにたなひきしらつらん　仁和寺后の入道法親王覚性

為家山花といへる心をよみ侍ける

晴ゆくや志らぬ山路にさそはれて入ぬとハ花の志るへなりけり　後徳大寺左大臣

尋花日暮といへる心をよめる

暮ぬとてねぬ人さへハおもふ山さくらたちとまりぬへきかな　源俊頼朝臣

花の歌とてよめる

花ゆへに志らぬ山路ハなけれとも迷ふハ春の心なりけり　道因法師

賀茂社の歌合とてよめる　法名釈阿

春をへて同し桜の花の色をそめましものハ心なりけり　藤原公時朝臣

花盛思ふ山へよりくれ春は心の留るなりけり　左衛門督朝臣

春日の社の歌合とてよみ侍ける

吉野川みなきハさしも梢とそ見るや花の志ら浪　寂蓮法師

故郷花といへる心をよみ侍ける　平忠度朝臣

さゝ波や志かの都ハあれにしをむかしなからの山さくらかな　読人不知

日吉の社に歌合とて人々読侍りける時よめる

さゝ波や志かの花園見るたひに昔の人の心をそ知る　祝部宿祢成仲

花の歌とてよめる

よし野の花の盛ハまたぬまにさそふ嵐や沖津白浪　賀茂成保

とふ人も花の盛に成ぬれハ山の岩根にかゝる白雲　円位法師

吉野山花の盛りやけふならむ空さへ匂ふ峯の白雲　藤原為業 法名寂念

遥見山花といへる心をよめる

春くれは白ひとそ見ゆる山桜花こそ高き峯になりけれ　源仲正

百首歌奉りける時よみ侍ける

白雲と峯の桜ハ見ゆれとも月の光ハへたてさりけり　待賢門院堀川

花の色に光さしそふ春の夜そこのまの月ハ見るへかりける　上西門院兵衛

歌合し侍ける時花の歌とてよめる

遠山の花の盛とみえしハ雲のあなたの峯の白雲　大宰大弐重家

さゝ浪やなかの山の岑おろしにさそハれゆく花の盛を　藤原範綱

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とてよみ侍ける

みよしのゝ花の盛をけふみれハこしの白根に春風そ吹く　皇太后宮大夫俊成

千載和歌集巻第二

春歌下

鳥羽殿におはしましける比常に花見んとてかた〳〵のこ
ゝろをつかうまつりけるついてによませ給ひける

咲しより散はてまてみれはてや木のもとにて花も日数を経ぬるかな　白河院御製

みこにおはしましける時鳥羽殿にて池上花といへる心をよませ給ける

池のみ汀の桜散しきて浪の花こそさかりなりけれ　院御製

山の花の心をよみ侍ける

白雲と峯にはみえて桜花ちれはふもとの雪にそありける　大宰大弐長実

百首の歌よみ侍ける時花の歌とて

吉野山花はなかはに散にけりたえ〳〵残る峯の白雲　[illegible]

寛治八年さきのおほいまうちきみ高陽院の家
の歌合に桜をよめる

山桜をしむ心のいくたひかちる木のもとにゆきかへるらん　周防内侍

一 後朱雀院の御時うへのをのこどもひんがし山の花見侍りける
よろこびにまかりて白川殿にまかりてとのゐ申すとて
侍りける時読侍りける
春ごとに散る花をしも惜しむ身は花も散らさじとこそ思ひけれ　大納言長家
落花満山路といへる心をよめる
ゆめかとも道てはゆくも見えぬまで散るや山路の花ざかりかな　赤染衛門
堀川院の御時百首の歌奉りける時よめる　上東門院
山ざくら花の心のさくらばかり花ともいはじやまざくらばな　前中納言匡房
花の散る木の下陰はよそにのみ人の心やみだれそめけん　権中納言実明
春と待つ花散るまでや奥山の風を桜にかこつらん　左京大夫基俊
崇徳院の御時百首の歌奉りける時花の歌とて
嵐吹く志賀の山べの桜花ちれば雲居にさざなみぞ立つ　真観法師
百首の歌奉りける時よめる
春風の志賀の山越え花散れば峰にぞ浦の波は立ちける　俊頼　前参議教長
花の歌とてよみ侍りける

桜咲く比良の山風吹くままに花になりゆく志賀の浦波　左近中将良経
花留宿といふ心をよみ侍りける
我が宿の花の梢はさそふとも見えまがひけり夜半のかげ　左近大将良経
落花の心をよみ侍りける
あかなくに神代にもあらず花の散るさくらの枝にふるは雪かは　権大納言実国
久我内大臣の家にて人々花の歌よみ侍るによめる
桜花ちりなばあかぬ別れかはいざさくらをと我が身わかれて　権中納言通親
花の歌とてよめる
山高み岸の山風や吹きぬらん花の白雲ちるや空にも　俊恵法師
一夜はわれも山桜かな宿やはらちる月ぞかなしき　僧都有房
我が花と見るはかなしき年の老いにけるかな　道因法師
あかなくに花の陰や風よりも散る桜かな　覚蓮法師
山桜我とみるとも人はうちゆかず　源仲綱
花の散るを見てよめる
よそにても見るべきものを桜花あかず散りにし池のかがみに　道命法師
池のおもてにうつる桜をよめる

桜散る木の下風はさらぬ山の花のちることをかくなりけり　登蓮法師

花落澗水といへる心をよみ侍りける

山風にたえずつゝむ花しあればいづれも谷の春のみなかみ　藤原範光

山家落花といへる心をよめる

花のちるころにてぞしる山里に払はぬ庭はあるべかりけり　藤原隆実

花落客稀といへる心をよめる

春くれば花こそいとゞ思はるれ散るまで人はとはぬものから　藤原基俊

みちの国にまかりける時なこその関にて花のちりければよめる

吹風をなこその関と思へども道もせにちる山桜かな　源義家朝臣

越の白山のふもとにて花のちりけるをよめる

場ふくられけるまゝにちりけるをよめる

春さめの白山の花のさかりぬり(?)亀のそこにうつる　源仲正

百首の歌たてまつりける時よめる

はるの山ひとりは花のちるをみてうきそらにひらく　前参議親隆

鈴鹿のよりもすれはちるの雪のかぜにさそはれしるかな　藤原季通朝臣

堀川院の御時百首の歌たてまつりけるによめる

思ひこそ散るを見てもとふ名残の杜の木の下かげ　前中納言匡房

堀河院百首の歌たてまつられけるとよめる

こよひ猶摘みて帰らん菫草野べに家居はなけれども　中納言国信

きのふまで見し野のつぼすみれ誰つみけむと思ひかね　修理大夫顕季

長承二年相撲立詞の歌合に菫をよめる

たえずして入野の原のつぼすみれつみにし人はまたとはずして　源顕仲

堀川院の御時百首の歌よみ侍りけるによめる

春ふかき井手の川かげそへつゝくりかへしんなゝへのとかや　藤原基俊

款冬の花咲きたりける井手の里人にやらんと　藤原基俊

堀川院の御時肥後が家にて山吹をよめる

八重ながら色はひとつぞ咲きにける　

九重に八重山吹をうつしては井手の蛙の心をぞくむ　二条太皇太后宮肥後

みな月に款冬をよめる

吉野川岸の山吹さく時は底にぞ深き色はみえける　藤原範綱

けふ見れば春の雪とぞ山吹の花のちるらん井手の川なみ　藤原元範

款冬をよめる

[illegible]花　惟宗広言

百首歌たてまつりける時落花の歌とてよめる

散る花はのちの春ともまたれけりまたもくましきわかさかりはも　前参議教長

[illegible]

[illegible]　[illegible]

永万二年内裏にて[illegible]をよみ侍りける

[illegible]の雲[illegible]　中納言[illegible]

百首のうたたてまつりける時よみ侍りける

[illegible]池の[illegible]　大炊御門右大臣

やよひのつこもりに法住寺[illegible]人々の[illegible]

をりしもあれ[illegible]

[illegible]よませ侍りける

[illegible]　二条院御製

百首の歌めしける時暮春の心をよませ給うける

花は根に鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人そなき　崇徳院御製

[illegible]　中務卿具平親王

百首の歌たてまつりける時暮春の心をよみ侍りける

[illegible]　大納言隆季

三月尽の心をよみ侍りける

[illegible]　久我内大臣

[illegible]　[illegible]

[illegible]　源仲綱

[illegible]　[illegible]

三月尽の日[illegible]

[illegible]　[illegible]法師

閏三月尽によみ侍りける

[illegible]

花のさくら[illegible]　[illegible]

わかるゝもひとつのみちにおもへどもたのむにつけて立別るかな　権大納言実家

堀川院の御時百首の歌奉りける時暮春の心をよめる

常よりもけふの暮るゝををしむかな今いく度の春としらねば　前中納言匡房

かへるさやめぐる花の藤しもかくてわすれじ暮ぬる春はあとともなしに　前参議親隆

千載和歌集巻第三

夏哥

堀川院の御時百首の哥奉りける時更衣の心をよみ侍りける

夏衣花の袂りぬきかへて春の形見もとまらざりけり　前中納言匡房

けさかふる蝉のはごろもきてみれば袂に夏は立にぞ有ける　藤原基俊

崇徳院に百首の哥たてまつりける時夏の哥とてよめる

わかれゆく春の別になぐさまぬ人や卯月のひとへめけん　前参議親隆

卯花をよめる

山がつの垣ねの卯花は木がくれぬまの月かとぞみる　左京大夫顕輔

暮見卯花といへる心をよみ侍りける

夕月夜ほのめく影も卯花のさけるわたりはさやけかりけり　右近大将実房

卯花のこゝろをよみ侍りける

かりにくる代々の卯花を雪かとぞおもふ（?）　仁和寺法親王守覚

白川院にて人々あまた哥よみ侍りける時

池上卯花をよめる

見てすぐる人しなければ卯花のさける垣ねや白川の関　藤原季通朝臣

山村卯花といふ心をよめる

卯花のよそめなりけり山里の垣ねばかりにふれる白雪　賀茂政平

卯花満宅といへる心をよめる

卯花の垣ねのみこそ思ひけれ賤のふせやの雪はふれれは　藤原親隆朝臣

山里にまかりて侍けるに卯花をよめる

風さそふ[illegible]のかきねのさかり[illegible]　藤原定通

堀川院の御時百首の歌たてまつりける時卯花をよめる

[illegible]夏は[illegible]の卯花の咲ける垣ねに月やすむらん　藤原基俊

賀茂社の[illegible]つかうまつりける時[illegible]の月くれのわかれ[illegible]となり侍けるに卯花をよめる

[illegible]山のふもとにさける卯花は[illegible]

仁和寺の御室にて人々に[illegible]歌よませ侍りける時　花園左大臣家内侍

郭公待[illegible]といへる心をよめる

[illegible]ふかき[illegible]郭公[illegible]の杉ふ[illegible]　藤原道経

郭公の歌とてよめる

郭公[illegible]山ほとゝぎすこゑも[illegible]ありけれ　賀茂重保

山寺にこもりて侍ける時郭公をきゝてよめる

[illegible]人[illegible]郭公[illegible]　道因法師

郭公をよめる

郭公[illegible]の郭公つれなくも[illegible]　殷富門院大輔

郭公[illegible]ひとこゑ[illegible]　刑部卿頼輔母

[illegible]郭公[illegible]　覚盛法師

崇徳院に百首の歌たてまつりける時郭公をよめる

[illegible]人[illegible]のこゝろ　前参議教長

[illegible]郭公といへる心を

[illegible]郭公雲のいづくのなきすぐらん　右近大将実定

暮天郭公といへる心をよみ侍ける

郭公[illegible]山のはの雲のいづくに　仁和寺法親王守覚

郭公の歌とてよめる

[illegible]郭公[illegible]の雲[illegible]　藤原清輔朝臣

こゑはさやかになきて郭公くもぢはるかにとほざかるなり　従三位頼政

右大臣に侍りける時家に百首の歌よませ侍りけるに郭公の
歌とてよみ侍りける

あふくらのまかねのす八郭公きゝなからまたなかぬをと　摂政前右大臣

暁聞郭公といへる心をよみ侍りける

郭公なきつる方をながむればたゞ有明の月ぞのこれる　右大臣

郭公の歌とてよめる

又聞るしとなくからきいつそ[illegible]のまだ宿とる哉　権大納言実国

夏の夜の月入りさの山にもやよそにもあらぬ[illegible]まつりけり　権大納言宗家

郭公すきぬるゆふの雲ぢにもゆくへしられぬ[illegible]　新蔵人[illegible]

摂政右大臣の時家の会に郭公の歌とて

こゑするかたの森の郭公もとめてきくらく　皇太后宮大夫俊成

右大臣家歌合に郭公の歌よませ侍りけるに

夜をとこそきかれしなより郭公いつれの(?)なくもしらまし　道因法師

郭公を読侍りける

一声もそれにとゞめし郭公のなくよひのまつかたの空　待賢門院中納言[illegible]

久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめる

旅人はひきさへつてそあやめ草よかり旅の枕なりけり　右中将雅光

菖蒲の歌とてよみ侍りける

五月雨にぬまじくひむらあやめ草ねはながくともあやめのそふも　摂政前右大臣

わかるゝはおもひのつゆとあやめ草をかりてあぢきなくもにせんすゝの　内大臣良通

後朱雀院の御時長久二年五月一品宮親王の家にて花橘を詠める

あかすのみ花橘の匂ひゆゑよそにまされと　皇太后宮大夫の女

題しらず

風よりの花橘に袖しめて我おもふ人のてまくらにせむ　藤原基俊

浮雲のいさよふ宵の村雨に追風しるくにほふたちばな　右近大将実定

旅宿の花橘にて風をなかしよりかほれしかりけん　右京大夫頼政

花橘薫枕といふ心をよめる

折しもあれ花橘のかをるかなむかしをこひてうちもねられぬ　俊恵法師

百首の歌めしける時花橘の歌とてよませ給うける

五月雨は花橘のかほりきてねぬ夜もまさるむかしなりけり　崇徳院御製

題しらず

有明ハおもひそめしを古き歌のことばのなかにも　宗尊親王御作
堀川院の御時百首の歌よみけるに有明の月をよめる
いつまでか此世の月をながめんと有明ならぬ我身とおもへば
おもひやる心ぞ人の…ながむれば…有明の月　源俊頼朝臣
中院入道右大臣中将の時歌合し侍けるに有明の月
の歌とてよめる
有明は秋こそことに…浦に…けれ　藤原家隆朝臣
土御門院御百首の歌よみ侍けるに
有明の月影…さびしきや…名残…　…
…みれば…の…しみ…月…　前大納言…
有明の月は…の…
…
有明の月は…浦…　侍賢門院堀河
摂政太政大臣家の歌合に百首の歌よませ侍けるに有明の月をよめる
有明の月は空の…八…の…　源…
詠有明の月といふ心をよめる

…
月前郭公といふ心をよめる
有明の雲の…月さへ…山の端に…　…
五月雨の頃…のとよ…
…
関路郭公といふ心をよめる
…関の…や…　中納言師時
後…の…八…
…
…山の…
…
…
…
堀川院の御時…有明の月…
…
有明の…山の…
…百首の歌…

ともしするはやまかすその下露やいるより袖のかくしほるらん　[illegible]

さ月やみさやまの峰にともす火は雲のたえまの星かとぞみる　[illegible]

権中納言俊忠中将に侍りける時家に歌合し侍りける照射の

心をよめる

五月やみしげきはやまにたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるる　藤原[illegible]朝臣

ともしのこゝろをよめる

ともしするほくしの松もかへなくに山の[illegible]　大蔵卿行宗

ともしするほくしの松の[illegible]　源仲正

山かつのかくしの松もつきぬれば[illegible]　読人しらず

ともしするはかくしとつゆしげきや[illegible]　賀茂[illegible]

百首の歌よみける時鵜河の歌とてよめる

ひとしれぬ鵜河の[illegible]　藤原季通朝臣

題しらず

[illegible]　源俊頼朝臣

おほゐ川かゝりさしゆくうかひ舟[illegible]

[illegible]とよみ侍りける

[illegible]　[illegible]

百首の歌の中に泉の心をよめる

[illegible]　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]　和泉式部

松下遊涼といへる心をよみ侍りける

[illegible]　[illegible]

泉にむかひて[illegible]

[illegible]　仁和寺入道法親王守覚

百首の歌よみ侍りける時泉の歌とてよみ侍りける

[illegible]　[illegible]

題しらず

山かげや岩もる清水の音さえて夏のほかなるひぐらしの声　法印[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　俊恵法師

[illegible]　[illegible]法師

泉邊納涼といふ事をよめる

せきとむる山下水にみかくれてすみける秋のけしきは　法眼兼雄

夜荻暁月といふ事をよめる

秋かせの荻ふく風も惜からむ野山のくれにのこる月　前大納言為家

夜月をよめる

夜かれよの月の光はさしてむかふかたにかゝる雲なからなん　祝部宿禰成仲

雨後月といふ事をよめる

夕立のまだはれやらぬ雲まよりおなじ空とも見えぬ月かな　俊恵法師

たなかの萬ち夜半にもまちて夏月如秋といふ事をよめる

中秋のかせふく庭の草葉にも秋ありて月はすむらん　藤原敦仲

萩花のちる秋といふ事をよめる

夜衣うつ声をきけはあはれなる旅の空かな　永縁法師

松風といふ事をよめる

松風は涼しくきこゆ夏山の　藤原資隆

前右衛門督備前守の心をよめる

夏ふかき森の下露をきてみれは　皇太后宮大夫俊成

光あるより夏の夜は月も涼しかりけり　藤原雅経

百首の歌よみける時みな月の祓をよめる

今日くれはみなかみかけて夜をこめて月の祓とおもひける　藤原季通朝臣

みな月の祓をよめる

はらへする川瀬のよるも涼しくて　読人しらす

千載和歌集巻第四

秋歌上

立秋日よみ侍ける

秋きぬと聞つるからに我宿の荻の葉風の吹かはるらん　侍従のめのと

あさぢふの露けくもあるか秋きぬとめにはさやかに見えてけるかな　二品親王

百首の歌奉りける時秋立心をよめる

秋のくるけしきの森の下風に立そふ物はあはれなりけり　待賢門院堀河

初秋の心をよめる

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでか秋のわけてきつらん　皇太后宮大夫俊成

秋はきぬ年も半にすぎぬとや荻吹風のおどろかすらん　寂然法師

[illegible]と秋風のけしきたつ[illegible]　[illegible]

秋立[illegible]といふ心をよめる

外山の松吹風もふきかはりて[illegible]　[illegible]

郁芳門院の前栽合に萩をよめる

[illegible]秋の[illegible]萩の[illegible]風　大納言[illegible]

初秋の心を
秋風や涙もよほすつまならん音つれしより袖のかはかぬ　待賢門院堀河
七夕の心をよみ侍りける
七夕の心は中やいかならん[illegible]　[illegible]
百首の歌奉りける時七夕の心をよめる
七夕の[illegible]秋風よ八十の舟の[illegible]　大納言隆季
堀河院の御時百首の歌奉りける時詠侍ける
七夕の[illegible]　[illegible]
七夕の心をよめる
七夕の[illegible]　[illegible]
百首の歌の中に七夕の心を読せ給ひける
七夕に[illegible]　[illegible]
七夕の後朝の心をよみ侍りける
天の川[illegible]　[illegible]
堀河院の御時百首の歌奉りける時詠侍ける

秋くれば思ひ乱るゝ刈萱の下葉や人の心なるらん　大納言師頼
題しらず
[illegible]　[illegible]
雲居寺瞻西上人房にて歌合し侍りけるによめる
[illegible]　藤原道経
[illegible]
秋きぬと風も告げぬに山里は[illegible]　[illegible]
題しらず
いかなれは上葉を渡る秋風に下折れすらん野への刈萱　読人しらず
人もかな見せも聞せも萩か花咲夕かけのひくらしの声　和泉式部
秋の山の[illegible]　[illegible]
[illegible]　藤原基俊
[illegible]
堀河院の御時百首の歌奉りける時詠侍ける
[illegible]女郎花一枝[illegible]　大納言師頼
法性寺入道前太政大臣の家にて女郎花随風といへる心を詠る

女郎花なひくをみれは秋風の吹くるすゑもなつかしきかな　前中納言雅兼

法事侍ける所に女郎花を見てよみ侍ける

女郎花洞にやとるやおもふらんおなし野をいく露のたつらん　家経朝臣女

題しらす

吹風にあさむく女郎花なひくをみても色のみかへる　藤原仲実

摂政右大臣家にて百合し侍ける時野径秋夕といふ心をよめる

夕されはやゝかにはれゆく虫の音をさへよはりてそゆく　前参議教長

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる

さ夜ふかく花そこなき秋の花のつゆにやとれる虫の音そする　源俊頼朝臣

野花留客といへる心をよめる

秋くれは常にとまるを旅寝にて野へこそ道の積なりけれ

百首歌よみ侍ける時秋の歌とてよめる

野へことにのへはしきしそめる時はしくれにそおもふ　藤原季通朝臣

夕されは野への秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　皇太后宮大夫俊成

題しらす

行くれのそてもさそふや旅人の里の秋の夕くれ　源俊頼朝臣

百首の哥よみ侍ける時花の心をよみ侍ける

さまさまの花をは宿にうつしうゑつ鹿の音さそへ野への秋風　藤原季経

野花秀宿といへる心をよみ侍ける

秋の野の千種の花にたはふれてあけの二葉そ見えける　二条院讃岐

題しらす

花すゝき秋の色とや見えつらむ山の端にさへなひくらん　源仲国

崇徳院に百首の哥奉りける時よめる

たくひなき秋の上にそ見えけるは秋よかくは秋の夕暮　待賢門院堀河

三日月のしものかゝる秋の夕暮　藤原清輔朝臣

題しらす

夕月夜吹く風の音に秋かなしもらそひけるを見てもかなしき　藤原季経朝臣

たへかねて人のいふなる秋ゆゑにまとふ身にしも秋そかなしき　円位法師

俊恵法師家にて秋の心を見てよめる

荻の葉にそよく音こそ秋風の身にしむ色のはしめなりけり　道因法師

ことに秋もやと思ふに侍ける

何となく秋のゆふへはものかなしき身にしむ風の音のみそする　前右京大夫

住侘ける山里をしもしらしめはしく須に後て海のしつかなる木の葉のみさく
しわまてうりかれし侍ほ
宿れはくいくかもおもかねは庵の隔秋の跡ふきもゆけるかな　　左中弁
思飛花と云心を読く
今よりはおもひなけんとすまの浦のうきねの秋のなみのおとかな　　藤原家経
秋の前にて読侍けり
夕されはをのゝわさたに露わけて心くまなく風の音すれ　　摂政前右大臣
ときはなる山の麓の山しかも秋はきにけりとみえさりけり　　皇太后宮大夫俊成
月の前あまた読侍りける時よめる
秋の夜はなかめしはしも月ならてみつらんと見る夕月夜かな　　殷富門院大輔
月の前十首よませ給ひける時よみ侍りける
秋の月まつほとの雲はなくてはれぬる月さえまさりける　　法性寺入道前太政大臣
堀河院の御時百首の歌たてまつりける時よめる
木枯の雲吹はらふ嵐よりさえてそ月のすむこのころ　　源俊頼朝臣
なくさめて月はかりとそいつまてはみけるらんさらしなの山　　隆源法師
摂政右大臣の家にて百首の歌よませ侍りける時月の歌とて読る
見ぬよりも月みる夜はをしけれはしこそしまへ住山のゆふくれの空　　藤原隆信朝臣
月の歌とて読侍ける
くまもなき秋の月影なかめつゝ人のかよひし道そしられぬ　　前中納言雅頼
皇太后宮大夫俊成十首の歌よみ侍りける中に月の歌
月見れはまつ思はるゝ心かな空にはいつの中よりそあらん　　右大臣
権中納言俊忠家にて旅宿の月といふ心を読侍ける
あはてこし野中の川の秋風に月のみ旅の宿りなりけり　　源俊頼朝臣
百首の歌の中に月の歌とてよませ給ひける
わかの浦の浦風よ吹けて月のよの月　　崇徳院御製
さよふけて冨士の高ねにすむ月は煙はかりやくもるなるらん　　大納言実定
あらしふく月も雲ゐに清見かた川よりさきの月かけ　　左京大夫顕輔
しかの浦の浦風よ寒けれは八十嶋かけてよる月かな　　前右京権大夫頼政
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時月毎秋久しといふ心を読せ侍りける時よめる
よろつ代をすむともあかし秋のよの月　　源俊頼朝臣
題しらす

山のはにまたれし月ハ月なれやいでゝもしばしやすらひにけり　藤原基俊
秋の夜や天の川せハこほるらん月のひかりのさえわたるかな　藤原道経
法性寺入道前太政大臣の家にて月の歌読侍りけるによめる
さゆる夜の声けハせぬ月清く[illegible]　太宰大弐重家
百首の歌よミ侍りける時月の歌とてよミ侍りける
都にて見しにかはらぬ月影の秋の[illegible]　[illegible]
海辺月といふ心を読る
須磨の関の果てありあけの沖にいでつる月かけ　俊恵法師
[illegible]秋の歌合にて旅宿を題にて読せ侍ける時よめる
やそうぢ浦のまさごをあかすしてつ秋の夜ハ月　[illegible]
衣てぞしぼる川のよさむにて月やおもなる[illegible]　[illegible]
湖上月といふ心を読る
月影ハ浦ミて見る波よりいづるしらつきのかげさえ　[illegible]
月前[illegible]といふ心を読る
照月の影さし[illegible]雲の下[illegible]　[illegible]法師
月照水といふ心をよめる

わきも来て[illegible]月かけ　藤原[illegible]
題しらず
それながらわが世の秋を[illegible]月ハみるも[illegible]　藤原清輔朝臣
身のうさの[illegible]月ハみる[illegible]　刑部卿[illegible]
ながさの秋ハ[illegible]月ハ[illegible]　[illegible]
[illegible]思ふ秋の[illegible]
法性寺入道前太政大臣の家にて月照水といふ心を
読侍りける
照月の光もきよし山の井の[illegible]　源俊頼朝臣

千載和歌集巻第五

秋歌下

題しらす

遥かなる唐まても行ものは秋の寝覚の心なりけり　大弐三位

堀川院の御時百首の歌奉りける時よめる

山里はさひしかりけり木枯の吹夕くれのひくらしの声　藤原仲実朝臣

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる

秋の夜は松を払はぬ風にしもかなしきことの音をたてぬかは　藤原季通朝臣

法性寺入道前のおほきおほいまうちきみ内大臣に侍ける

時の家の歌合に秋風といへる心をよめる

霧はらふこゝろ飛ぬくく秋のたはにほひまさきの風の音かれ　藤原時昌

承暦二年内裏の歌合によめる

夕されはいとゝ荻の葉吹風にめさめてまさる庵のうすゝれる　藤原顕綱

堀川院の御時百首の歌奉りける時

みむろ山おろす嵐のさひしきに妻よふ鹿の声たくふなり　二条太皇太后宮肥後

さ夜ふけは道やまよへる小男鹿の妻こふ声は遠さかりゆく　大納言実定

題しらす

旅のよは聞し尾上に鳴鹿の涙やまくらにおくらうつかな

田上乃里にやとりて鹿の鳴をききてよみ侍ける

さを鹿の鳴音は野へにきこゆれと涙は床の物にそありける　源俊頼朝臣

百首の哥奉りける時よめる

さらぬたに夕へさひしき山里の霧のまかきにをしかなくなり　待賢門院堀川

夜泊鹿と云事を讀る

みなせ川さのはれ宿よ守る山田のいほのともしかの声　刑部卿頼輔

うきさのひくれはいつの浦よ山田也鹿の声からて寝覚なく　皇太后宮大夫俊成

秋をとめて萩の花の世をとききれは遠よ逢きとしかの声　俊恵法師

みなと川よふねこき出る追風に鹿の声さへせと渡るなり　道因法師

鹿声遠方と云心を

夕暮の小萩か原を行程は鹿の声とさへあそゆくる　覚延法師

鹿の歌とてよめる

さとしの音さへ絶てやいつるや夕へにそきこえ出らむ　左京大夫脩範

ゆふまくれのこしく神のめくりの鹿の声をきかは秋やうかりけん　左京大夫季経

山里の暁方の鹿の声は秋中の長にかよひ也けり　法印静賢

よそにては鹿の声をいかに聞らん雲のかよひの夢さめ侍らん　俊恵法師

夕まくれさひしきや秋のこころならて鹿の声ぬ人そや　道因法師

常よりも秋の夕へを哀とは鹿の声にや思ひそめけん　大宰大弐重家

さひしさを何にたとへん鹿のなく深山の里の明方のそら　祐家

いつまてか聞けるらんさとしの夢さめ侍らめやの涙　覚延法師

尾上より門田にかよふ秋風にいなはをわたるさをしかの声　寂蓮法師

題しらす

松風の音にそ有ける秋の山いつくより鹿の声かなれ　読人しらす

神門の萩か下をれなにとそせうし山田の風の音にかよふ　源兼昌

宵のまは鹿の声をわかすは秋は来るのにのかなしけり　寂蓮法師

秋の夜はなかなか鹿の声をもきかで夢のあと涙をのこす　左京大夫顕輔

暁聞鹿とよみ侍ける

さ夜ふかくのわかさらぬ鹿の鳴声を聞たひことに涙をそのこしつる　左近中将良経

百首の哥奉りける時よみ侍りける

虫とりさへ霜よりかれし物の音は秋の暮ねる庭と知らずや　左衛門の右大臣

蛬のよく鳴けるをよませ給ひける

秋ふかく成にけらしなきり〴〵すゆかのあたりに声きこゆなり　花山院御製

保延の比ほひ身を恨る百首の歌よみ侍ける時虫の歌とてよめる

さりともと思心も虫の音もよわりはてぬる秋の暮かな　皇太后宮大夫俊成

題しらず

虫の音もまれに成ゆくあだし野に独秋なる月のかげかな　道性法親王

草も木も秋の末葉ハ見えゆくに月こそ色ハかはらざりけれ　式子内親王

崇徳院の御時九月十三夜月宴侍けるに読侍ける

もろこしのさやけき秋の稀にこそ今宵の月ハ較ハのかん　大炊御門右大臣

十三夜の心を読る

秋の月おほくの夜にはてらせども一夜に心まよふ人ぞなき　まうち法師

月前擣衣といへる心を

さよふかく嵐の音に身にしむる月を見つゝや衣うつらん　仁和寺法親王守覚

堀川院の御時百首の歌奉りける時擣衣

衣うつや妹かひとりの衣まれにつまよりの音に千代ふる声　大納言公実

松風の音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川の里　源俊頼朝臣

たゆくさめよはには誰か唐衣うちもやむらん家の旅床　藤原基俊

旅宿擣衣といへる心を読る

衣うつ音をきくにそしらるゝ里とほからぬ草枕とは　俊恵法師

霧の哥とてよめる

夕霧や秋の哀をこめつらむ分入袖に露のおきそふ　法橋宗円

菊の草花といへる心をよませ給ひける

秋ふかみたそかれ時の蘭匂ふは名のる心ちこそすれ　崇徳院御製

百首の歌奉りける時よめる

いにしへも岩もとかれぬ菊なれや千代をかさねて匂ふらん　前参議親隆

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時歌合に残菊をよめる

今朝見れは夜半の霜をいたゝきて残りこそ咲く菊の花　藤原基俊

月照菊花といへる心をよみ侍ける

白菊の花は雲にやまかふらんすみれぬ暁の月　内大臣

離菊如雪といへる心を読侍ける

雪ならハ籬にのミハつもらしと思ひとくにぞ白菊の花　前大僧正行慶

菊の歌とてよめる

わかやとの籬のきくはうつろへと春さへ冬のかたみなりけり　祐盛法師

百首の歌よみ侍ける時菊の歌とてよめる

雲もなくおきまよふやと月に映る白菊の花　藤原家隆

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる

おほかたの秋のくれこそ秋の心と思ひしらるれ

醍醐西上人雲居寺にて結縁経の後宴に歌合し侍けるに野風

の心を詠る

秋の野の草はそよきて秋風のふきしく野への露の上かな　藤原基俊

紅葉の心を詠侍ける

紅葉ちる比はとなせの山かせに色もくれなゐのこすゑなりけり　仁和寺後入道法親王守覚

村雲のたちかへりつゝ時雨るれはかさねてそめる秋のもみち葉　静縁法師

秋の歌とてよめる

時雨ゆく空もさためぬ秋の日に千々に染めける峯のもみちは　藤原定家

題しらす

ありあけの月にやくへのこすゑかな紅葉とてらすにほひなりけり　道因法師

宇治の家にて太政大臣のもとにて紅葉見に侍りて詠る

君みすやかさねてしけん南殿紅葉の錦たちもかへらしや　小弁

紅葉の錦をよめる

立田ひめおりかけてをるからにしきなとて紅葉のちりかゝるらん　寂蓮法師

歌合し侍ける時紅葉の歌とてよめる

山姫のよそへの錦とおもひしもちりかゝるをそいひそめける　大宰大弐重家

月照紅葉といへる心をよみ侍ける

紅葉はに月の光をさしそへてこれやあかちの錦なるらん　院御製

嘉応二年法住寺殿の殿上の歌合に関路落葉といへる心を詠侍ける

山おろしに浦つたひする紅葉かないかゝはすへき須磨の関守　右のおほいまうち君

清見かた関にとまらて行舟は嵐のさそふ紅葉なりけり　大納言実家

紅葉はを関守る神にたむけおきて逢坂山をすくる木枯　権中納言実守

紅葉ちるころのなこその関なれやもりもりとめぬ白川の関　左大将兼宗

都にはまたあをはにて見しかとも紅葉ちりしく白川の関　従三位頼政

湖上紅葉といへる心を詠る

さゝなみや比良の山かせにもみちはと海のなみさへ見えわたるかな　刑部卿範兼

百首の歌奉りける時読る

小倉山雲の村雨ふりにけりしぐれて秋の錦なりけり　藤原清輔朝臣

題しらす

秋ふかく入にし山の松風に紅葉ちりしく庭をこそみれ　寂蓮法師

逍遥院の御題に庭落葉といふ事をよめる

庭の面に落て積れる紅葉ハ小倉の山の錦なりけり　前右大臣

大井川にて紅葉のちるをよめる

ちりまかふ紅葉の山の大井川みなせに流るゝ錦なりけれ　俊恵法師

大井川かはらぬ紅葉のちる時ハくれなゐ深きなかれなりけり　道因法師

百首の歌の中に紅葉をよめる

今はとて小倉の山の紅葉のかけに嵐の吹にけるかな　藤原清輔朝臣

紅葉の色をよめる

小倉山麓の里ハ[illegible]紅葉のちりてかゝる錦か　祝部成仲

吹みたす時雨と共に嵐風に紅葉のちるを見るかな　賀茂成保

松間紅葉といふ事を読る

冬の来ぬ雲の嵐の吹ぬれハ松のみどりにちりかゝりけり　藤原親仲

家の紅葉といふことをよめる

家の庭ハ嵐のはけしさにかつちりまかふ紅葉をそみる　頼政

題しらす

紅葉ちる嵐の風の寒けれハ庭に秋のくれはてにけり　法橋道寿

堀川院の御時の百首の歌奉りける時よめる

秋の田は紅葉ちりしく山里に[illegible]にけるかな　源俊頼朝臣

百首の歌よませ給ひける時紅葉をよみて読給ひける

紅葉ちる音羽の川の夕附日秋の錦をたちやかさねん　後徳大寺左大臣

紅葉深山といふことを読侍ける

嵐ふく秋のやまかげの紅葉の色も山川に流れさりけり　皇太后宮大夫

百首の歌奉りける時九月尽の心をよませ給ひける

紅葉ちる秋もけふまてくれてゆく色のこるらん　崇徳院御製

山寺秋暮といふことを読侍ける

さをしかのなく山里の嵐にて秋の暮をそおもひしりぬる　前大僧正覚忠

雲林寺にて法輪のほとりに九月尽の

心を読侍ける

かく帰る秋さへしらて行秋をやすくも越る山路なるらん(?)　醍醐西上人

暮ぬとも猶秋風はおとつれて野へのけしきよおもかはりすな　源俊頼朝臣

承暦二年内裏の歌合に紅葉をよめる

高砂の山の紅葉もちりにけりあらしに秋はのこりけり(?)　中納言匡房

百首の歌よみ侍りける時九月尽の心をよめる

こよひまて秋はかきれとなかめつゝあかしつる(?)　藤原家中大夫(?)

千載和歌集巻第六

冬哥

堀川院の御時百首の歌奉りける時初冬の心を読侍りける

かつふらて時雨は雲しらぬの風にやくれのうすゆらん(?)　大納言公実

いかはかり秋の名残をなかめまし今朝は木葉に嵐ふかすは　源俊頼朝臣

いつゝ川のみなきはさのふかけれは紅葉の淵そ冬はなかりけり(?)　藤原仲実朝臣

百首の歌めしける時時雨の歌とてよませ給うける

濃くさかりみちたる峰の時雨て庭のおもしろきかりけり(?)　崇徳院御製

さゝ浪の紅葉も今は霜枯て軒端へよりや冬や来ぬらん(?)　大炊御門右大臣

よむのとならは紅葉をめとしてちらす(?)　大納言隆季

秋のうちはあはれしらせし風の音のはけしさそふる冬はきにけり　前参議教長

静かなる上寝覚のとこそれきくもあはれなりけり(?)　道因法師(?)

山家の初冬をよめる

山川のたえまの水はこほるらんさらそそあられのまとかめ(?)　藤原孝善

題しらず

冬きて山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峰にさびしき　祝部成仲

百首の歌奉りける時初冬の心を読侍ける　大炊御門右大臣

初霜やおきはじむらん暁の鐘の音こそうちしめるなれ

堀川院の御時百首の歌奉りける時よめる

高砂の尾上の鐘の音すなり暁かけて霜やおくらん　前中納言匡房

楸生ふるをのゝ浅ぢにをく霜の白きをみれば夜やふけぬらん　藤原基俊

冬の初歌とて

冬きては一夜二夜を玉ざゝの葉わけの霜の所せきまで　藤原定家

題しらず

霜さえて枯ゆく小野の岡辺なる楢の広葉に時雨ふる也　藤原基俊

ねざめしてたれかきくらんこの比の木の葉にかゝる夜半の時雨を　馬内侍

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時歌合

に時雨を読侍

音にさへ袂をぬらす時雨かな槙の板屋の夜半の寝覚に　源定信

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる

まばらなる槙の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらん　皇太后宮大夫俊成

時雨の歌とてよめる

木葉ちるやどりやかてそ時雨ふる山めぐりすなり　仁和寺法親王

暁時雨といふ事をよみ侍ける

独寝の涙や空にかよふらん時雨にくもる有明の月　摂政前右大臣

さまざまの色やかはらん時雨ふる空をながめし時雨ふるらん　藤原隆信朝臣

時雨の歌とて読侍る

山めぐる雲の下にやなりぬらんすその野原に時雨ふるなり　従三位頼政

時雨ゆくをちの山の紅葉ゝは梅りもあへぬ雲やゆくらん　俊恵法師

嵐吹比良の高根のねわたしにあはれ時雨る神な月かな　道因法師

堀川院の御時百首の歌奉りける時時雨の心を

み山べの時雨てくらき杉むらに紅葉しぐれにさそはれて　中納言国信

木の葉のちるをみるにも時雨はけふもさきだちてふりけるぞ　二条太皇太后宮肥後

会俊恵法師人々によませ侍ける百首の歌読せ侍ける時冬の心を

時雨ゆくまやの軒端のほどなきにやがてさし入月のかげかな　藤原定長

野寒にみさゝの原を吹きなして時雨の空に雁の鳴なり　読人しらず

山家時雨といへる心を

あらしふく山のはしるゝ雲はれて夕日にかゝる時雨なりけり　源仲正

題しらず

暁のねざめよりこそしぐるなれ誰も人の袖ぬらしけれ　紀康宗

落葉の心をよめる

散りつもる木の葉の風とのみ聞けばかくやはふらん山への里　藤原国雅

中納言定頼世をのがれて山里に侍けるにつかはしける

都にはさすがにこそはおもふらめ山里人の袖やぬるらん　中納言定雅

定頼によみて侍けるに返し

いかばかり宇治川浪にさわぐらんよるせも見えぬ網代木　中納言宗家

堀川院の御時百首の歌奉りける時落葉をよめる

嵐ふくそのはらくさのちらとぞ見えてつもる木の葉を　藤原仲実朝臣

落葉のふみ分てみる秋のおとしてくれ行く空の音ぞ聞ゆる　俊恵法師

冬きぬる山ざとにこそ立ちそめし雪ぞ降るなるまだ人も見ぬ　源俊頼朝臣

傅大納言道綱家の歌合に千鳥をよめる

妹がりとさ夜の川風さむからし千鳥なくなり　藤原長能

千鳥をよめる

すまの関有明の空に鳴く千鳥かたぶく月はなれもかなしき　皇太后宮大夫俊成

岩こゆる荒磯浪にたつ千鳥心ならでや浦つたふらん　道因法師

暁になりやしぬらん月影の清き川原に千鳥なくなり　右大臣

霜さえて更行く夜の浦風に友まどはせる千鳥なくなり　法印静賢

夜もすがら友よぶ千鳥の声ぞする浦さびしくや有明の月　賀茂成保

水鳥をよめる

かくしつゝ身はや浮きゐる鴨ならん鳴く音のみしてよるべなき　源親房

題しらず

水鳥を水のうへとやよそに見む我もうきたる世をすぐしつゝ　紫式部

堀川院の御時百首の歌奉りける時

氷ゐる池の汀のつらゝにてたえまの八重の浪ぞさびしき　前中納言匡房

百首の歌めしける時よみ侍ける

よの程にさえまさりけり鴛鴦の上毛の霜よ下の氷よ　崇徳院御製

かつこほる入江をめぐる葦鴨の玉藻の床にうき寝すらしも　左京大夫顕輔

歌合し侍けるにといへることを

としふれはゝき孫の家やたちかへりくもりなく見ゆるしら氷池のみつ　権中納言実房

千鳥のうたとてよめる

晴くもるかけをみやこにさきたてゝしくるとつくるやまのはの月　道因法師

霜さえてかれゆくをのゝをかへなるならのひろはにしくれふるなり　賀茂重保

月前水鳥といへる心をよみ侍りける

水鳥のうきねの月のかけなれは氷とみえてなかるゝもあり　右近大将公光

冬の月といへる心をよみ侍りける

夜をさむみ孫枝に氷のまさりゆくはをしの羽風にさゆる月かな　平実重

氷の歌とてよめる

さゝなみや月はみきはにうつりけりこほりやとけてよるのしらなみ　右大臣兼実

冬されは氷にとちてゆくみつもいはまの井にはむすひさりけり　藤原成家朝臣

月のうちはあかしのうらのうきなみにこほりもよらすそてにあけゆく　道因法師

百首の歌めしける時氷の歌とてよませ給ける

つらゝゐてみかけるかけのみゆるかなまことに今や玉川の水　崇徳院御製

月さゆる氷のうへにあられふりこゝろくたくる玉川のさと　皇太后宮大夫俊成

閑居霰といへる心をよみ侍りける

さゆる夜のまきのいたやのひとりねにこゝろくたけとあられふるなり　左近中将良経

山家の初雪といふ心をよみ侍り

あさあけて見るそさひしきかたをかのならのひろはにふれる白雪　大納言経信

百首の歌の中に雪の歌とて讀せ給ける

夜をこめて谷のとほそに風さむみかねてそしるき峰の初雪　崇徳院御製

さえわたる夜半の気色に深山辺の雪のふかさをそらにしるかな　藤原季通朝臣

ふるとやは紀の人はしらんけふも山さしはしにふれるしら雪　藤原清輔

雪の歌とてよみ侍り

白花のみたれてちるのみやまには道も八重にや跡のたえなむ
ちりまかふらん　藤原資隆朝臣

あしかへていはむ山かけの庭のふる雪　仁和寺後入道法親王

たか山のかけのふる雪はたれゆくらむ道のたえても見えねかくれん　前参議教長

京極太政大臣家の歌合に雪の心をよみ侍りける

ともすれは山の白雪もろともにたえて見えつゝ根さしなりけり　源仲正通俊

み山路のしたくもりけるしらゆきにおもふ心もあさましきかな　藤原親隆朝臣

跡たえて谷のかけはしうつもれてやそのみち山にはれる月かな　源俊頼朝臣

うへのをのこども百首の歌奉りける時雪の歌とてよませ給ひける　二條院御製
雪積もる峰にふぶきや渡るらん越のみ空にまよふ白雲

遍照寺にて池上雪といふ心を讀侍ける　二品法親王守覺
流けハけの雪と消なましかハかりそくらゝ池のかゞみか

雪の歌とて讀侍ける　右大臣
山里の庭にハ雪に埋もれて跡へたてゝかよふ人なし

行しほたかりも雪に埋もれて人も通はぬ道となりけり　右近大将實房

うら続く今そら白く浪さえて山雪ふかき時の夜半にかくれ　後三條殿

浪まより見えしけしきぞかはりぬる雪ふりにけり松が浦しま　別當法師

摂政右大臣に侍ける時百首歌よませ侍りける時雪の歌とてよめる
ゐなの嶺の山とふ浪せハ尾上にもあかつきのうらの道　藤原良清

醍醐の清瀧の社にて歌合し侍ける時よめる
路もなく折ふしの跡も埋もれて友ならぬ雪に山里　藤人不知

行源雪といふ心をよめる
道の辺の川沿柳に埋もれぬとて人やなほ降るらん　西行法師

題しらず
見ハ行の雪まてふれるかのかゝりせハわか花といひまし　坂上明兼

雪の歌とてよめる
よもすがら東風にて渡るゝも雪の聲にしるかれ　藤原為季
雪ふれハ本さへに梢も咲かり枝よりかの花そ散けり　俊惠法師

閑路滿雪といへる心をよみ侍ける
路もなく越しける道ハふりつむ山雪とぞ関の戸さしもなかりけり　内大臣

年内に梅の花咲けるを見て讀侍ける
山里の垣根の梅ハ咲きにけりかゝれる雪ハ花もにほはゞ　天台座主明快

雪中早春といへる心を讀侍ける
わかき春しらぬ花もあらん深雪に花とてそ年の内の梅かも　前大納言實長

くれのこそ行けむとの暮によめる
きりたく暮くるゝ流の年も今年の暮果にかり　前左衛門督公光

年の暮の心を讀り
暮ゆく暮行年の日数をかぞふれバ数のまくらなる　相模

歳暮述懐のこゝろをよめる
数ならぬ身にはつもらぬ年ならばけふの暮をも歎かざらまし　惟宗廣言

おしみ(?)かね(?)くれゆく年の暮にはまして(?)我身のをしき(?) 源光行

歳暮の心をよみ侍ける

一年ハはかなき夢の心ちして暮ぬるけふそおとろかれぬる 前律師俊宗

[illegible]なくては(?)大弐(?)よこの(?)りのそ(?)侍けるに(?)関白(?)前太政大臣(?)

よろつの心を聖人(?)によませ(?)侍けるによみ侍ける

[illegible]とり(?)もやと(?)思ひつるにや年の(?)[illegible]暮ぬらむ 民部卿親範

千載和歌集巻第七

離別哥

宇治(?)のつくし(?)の餞しけるところにてよみ侍る(?)

むかしみし心はかりをしるへにておもひそおくるいきの松原 左京大夫(?)朝臣(?)

有国大弐にてまかりくたり侍りける時(?)よみ侍りける

別よりはかなき(?)こと(?)も命(?)なる(?)[illegible] 前大納言公任

[illegible]海(?)[illegible]人のまたかへ(?)[illegible] 九月

[illegible]の末(?)[illegible]まかり(?)[illegible]れて

鳴よわる籬のむしもとめかたき秋の別やかなしかるらん 紫式部

堀川院の御時百首の哥たてまつりける時別の心をよみ侍ける

かへりこむほとさためぬ別路ハ宮このてふりおもひいてにせよ 大納言公実

ゆくすゑ(?)を待へき身こそ老にけれ別ハ[illegible] 前中納言匡房

[illegible]山[illegible]

[illegible] 源俊頼朝臣

[illegible]定めぬ[illegible]のはやし 大僧正行尊

百首の中によみ侍りける別の心を　左京大夫顕輔
ながらへてかはりて後はたのまれやその別するへき　上西門院兵衛
限あらん道こそあらめ此世にて別るへしとは思はさりしを
参議資通大弐にてつくしへまかりけるに餞すとてよみ侍りける　藤原経衡
行末をしらぬ別のかなしきはけふやかきりのおもひなりけり
返し
年をへて人の心をみるまてにかくは花の色こそありけれ　大宰大弐資通
ちきりしにかはらぬ花のまてしはし時人に渡りけるをりから　道命法師
人の法會ありけるに守護の袖の露に濡れて後のかりそめに
ある時の空に袖を別るゝころによめる
なかなかに人をおもひしよるの袖にこのこそおもひいたれ　天台座主源心
ぬれつゝ海わたるかことのかりにそかなしきの袖にも
せめてかりにわかれにしかすみをとめてなみなかつかる
君ならて誰も別るへきかたあらはいつかはとのみたのまれ　よみ人しらす
離けるかとのみ見えしかなるとはいつのまにかは何をたのまん
わかれてもおもひよそへはひとつ空の月のかけこそやとりけれ　和泉式部
　成尋法師入唐し侍りける時よみ侍りける
思ひやるその別路とおもふにはなくなくこそ見れ月のかけ　成尋法師母
　百首の歌奉りける時別の心をよめる
忍ふとも定めなきこそかなしけれたれにわかれのなこりをしとはむ　後拾遺集
夜の法の光にてらす人の袖かことのおもひに乃なりけり
まれにあひきてなれにそのかりそめのかれなんも　西行法師
ぬれにし袖に別れてまたいつか山路にいつしかことにしらて
源雅盛年法師のもとへつかはしけるのたよりに
まかりける時にまたもこえてよふりけるに海路の波
乃秘曲のことをならひしてそのきはにてかへりにけれ　入道前太政大臣
と人に形見とていかにかさらぬ海の波よりもよりあれな
人に餞し侍りける時よみ侍りける
いつの日か行山の月みてもかたらはなりにけれ　右衛門督家宗
　百首の中に侍りける時別の心を
別てもおもひやるかな都をは山路はるかにへたつとも　藤原定家

千載和歌集巻第八

羇旅哥

題しらす

またゝひの月もろともにいてしかと今宵は誰しのふ坂の里　花山院御製

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時関路月といへる心をよみ侍りける

こりゆるや浦はれ関やの杉ひさし月のもるにやあれまさるらん　権中納言師俊

月前旅宿といへる心をよめる

あらし吹すまの浦人萩わけて妹恋しらにみつる月かな　藤原基俊

堀川院の御時百首の哥たてまつりける時旅の哥とてよめる

浪のうへよりゆく舟をとめしや八瀬の関やに宿をかりせは　中納言国信

行路雪といへる心をよみ侍りける

まよひ出し袖さへ風をさそひて袖の雪はらふや鈴鹿の中山　八条前太政大臣

海辺旅宿といへる心をよみ侍りける

あまのたく藻しほのけふりたちかへりかくれて見えしほかにあれは宿る　神祇伯顕仲

舟泊園よとかりそめ時よめる

立しくてゝやみ濱しよりき北海のほかにみちこそかへりせハ　赤染衛門

播磨国に侍りけるにあかしのうらを見てかへるとてよめる北山

みちよりよみ侍りける

あきかせの北松とふく分てゆくそのゝ浦をすきとまりなん　能因法師

大隅守にてくたりけるに松を見て浦を過ぎるにこそ

らくめきれはよめる

住のえの月をみむとのぼりつゝ今年とふるゝ　津守有基

天仁元年従三位郡行の時三井といふ所にてよめる

別行旅の空に立ちつゝはるかにしのふ三井のかゝり　藤原友用

法性寺入道前太政大臣の時内大臣の家にて旅宿の月といふ心を

さよふかき井のうへの月もさえにけりおきてはつれし蘿の衣　源雅光

百首の歌めしける時旅の心をよませ給ひける

わかれ衣袖の涙やかはくらん月もさひしきのうへにこそしれ　崇徳院御製

松か根の枕も何かあたならむ玉の床とて常のとこかは

旅宿のこゝろをよめる　大炊御門右大臣

さらぬたに寝覚め月にはなほ夜をこめてゆくかな　前参議教長

道もなく空とも見えぬ山は雲とまるみち　待賢門院堀河

このたひを又あふまじき旅の草枕ゆるさむ　二条院讃岐

浦つたふ磯の松かねにねてしるかな旅の宿

世をそむきてのち海辺にて月の夜に　左京大夫修範

いその家さへ浪をしてそこに思しかとなる　円位法師

ありまの湯にくたりける時よめる

宮こ出てたらぬ旅の中に思わる道のはつ　二品法親王覚性

志て行けの旅に月のまどろまぬいとへる枕の上に　二品法親王

かはる夜のはるゝ山里に行くかな思ひのする　前中納言師仲

ありまの方に湯あみにまかりけるにみちより海辺を見て

旅の宿にてよみ侍りけるかたらひ明し待りける　左京大夫脩範

海辺にて月を見てよみ侍りける

わくまでも月のさすしと鳩のなきの松の梢にうつすへしとも　

尾張の国よりのほりてよみ侍りける

のちに思いてしるゝ浦にひかりをまつ

月をみて　道因法師

あふ坂の関といへる心をよめる
あふ坂の関にあへたるしみつはかけをのみ見てすきやせむ　祝部成仲
中院の右大臣の家の歌合に逢坂の関の心をよみ侍りける
越えてゆく人にあふ坂の関路にはさもあらぬ心をとゝめけるかな　大納言定房
百首歌よみ侍りける時旅の心をよみ侍りける
きのふけふ峯の雲路をわけこえて今日ゆく末はいとゝはるけき　前大僧正覚忠
旅宿の雨といへる心をよみ侍りける
旅寝して宿とふ人もなき夜半はたゝよそにのみ聞きけり
風の音に聞くさへものうき松風は枕にかよふ時雨なりけり　右近大将実房
なにはかた浦の風にや旅人は夢路もたえてかへりけり　俊恵法師
おもふこと夜ふかくさめてきく袖にかゝるなみたのつゆそかゝるや　源仲綱
草枕おもひしられて袖にまたおく露しけき旅ねなりけり　太皇太后宮小侍従
家に百首歌よみ侍りける時旅の心とて読侍りける
ふるさとに清く見えけり沖つ白浪ときはの松風をいかにきくらむ　後徳大寺左大臣
よそにても波をそきこし旅寝せはいつかは見えむ　刑部卿頼輔
わか思ふ人の宿にかはらぬ夢をみてこそ旅にいたりけり　皇太后宮大夫俊成

旅宿の心をよみ侍りける
うきねするかりのやとりのさむしろにおもひもかけす露そこほるゝ　二品親王
旅の心とて読侍りける
旅の世に又旅寝して草枕夢のうちにも夢をみるかな　法師慈円
草枕かりの庵にくらしつるまにまにいく夜ねさめしつらむ　右兵衛督隆房
関路暁月といへる心をよめる
あけかたの月はかけさへのこりけりやすらふほともしらぬ関守　法眼兼覚
百首歌よみ侍りける時旅の心とて読る
ともすれは波の浦かせさこそふかめ袖の浪まにかけまし　藤原家隆
海のほとりにてありける比宿りし侍りける夜旅の枕の
寝さめしけれはよめる
かつ見ゆる夜床にかゝる浦波のしほのひるまもなき草枕かな　円玄法師
旅の心とてよめる
ともすれはさえける袖にしくれこし旅寝さやの中山　摂津守光季
摂政右大臣の時の家の歌合に旅の心とてよめる
旅寝する庵をもる月の影ともさこそは袖かはれけれ　藤原資忠

旅の歌とてよめる

春とゝもに彼の関路にたちいてゝさかりは過ぬとさそひけれ　大中臣親家

ひのもとのうちにしてさへ事の国にゆけは河よめる

わたつうみに流されて侍りける時、古さとは都のかたり侍りける　法名性照　平康頼

さつま方おきの小島に我ありとおやにハつけよ八重の塩風

羇中歳暮といへる心をよめる

あつまにて年もくれなはいかにせん年ふりにける白川の関　僧都印性

寂蓮法師人々すゝめて百首の歌よませ侍りけるに旅の心をよめる

業平のむかしの旅寝の夢さめてまた宿かりの夕くれの空　寂蓮法師

千載和歌集巻第九

哀傷歌

花のさかりに藤原為頼朝臣のむすめ身まかりて后宮に侍りけるに

つけゝると申ける宮の御方よりなくさめらるゝ事侍りけれは又のひ

まかりて後すゝむかしをおもひいてゝなけきける時中務宮よりつかはしける

にかりし又の年その家の花をみて大納言公任のもとにつかはしける

春くれは散にし花も咲にけりあはれ別のかゝらましかは　中務卿具平親王

返し

ゆく人の春や春しらん契しし人のまさらましかは　前大納言公任

見さりし家のさくらをみてよめる

こゝろさし人の亡くなりて宿のさくらを詠めしかは　藤原範永朝臣

後正子内親王かくれ給ひてのちよめる

わすれても花のさかりに見てかなしき人の形見にちるを見るへし　和泉式部

まつひとの(?)よしなき事にたれをしかねなくらん

夜山ふかくきえぬとならてまたつらくゆけり

はかなしのその身やことにつきぬとはゝかなきうきよにそめぬめり　藤原為任朝臣
　みこの男侍りて後は女房はらからなくなりて読侍ける元
　中将宣信朝臣の男侍りけるがきえうせ侍りてのちよめる
先立ひとさの形見をすてゝあはれてふ雲なふらし　藤原兼孝
　世のはかなき事を思侍けり
現は夢しえぬその身はいつかはとそ思ひそめける　花山院御製
　一条院かくれ給ひてその又の年しもの院の花をみてよめる
さくら花さてもちりぬるものゆへにゆくの春はさらにあはれなりけり　源道済
　花山院かくれさせ給ひての比の事を読侍けり
忘られし心もしらぬ御世の事をおもひやるかなしさにそふ涙あらん　道命法師
老ぬれは命のあはれなりけるとなかめしてこそ別れなりけれ　藤原長能
　後一条院かくれさせ給ひて此年のこりける侍従読侍ける
なきよにつけても時雨とめ見てもいとゝ涙そかはるゝ　上東門院
　枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後の事を思ひ出てよめる
かれぬ深き恋しき人をもとめつゝ陽明門院一条殿の事を

　五月五日枇杷皇太后宮かくれ給ひての年内侍のもとに菖
　蒲をおこすとてそのねにかきつけ侍ける
あやめ草涙の玉にぬきかへて折ならぬねをなほそかけつる　弁乳母
　返し
あやめ草かけし袂のねをたえて更にこひちにまとふ比かな　江侍従
　大納言長家の大納言斉信の女に住侍けるを女身まかり
　にけれは法住寺にこもりゐて侍けるにつかはしける
ためしなきかはおもひもかくるまき流れたえせぬ人をさそへは　大弐三位
　返し
夢とのみ思ふ人にもとはれつゝあはれはかなき世をなけくかな　大納言長家
　一条院かくれさせ給へりけるまたの秋月をみてよみ侍りける
大かたはさやかに見ゆる秋の月涙の色はへたてぬるかな　承香殿女御
　後一条院かくれ給ひての又の年九月つこもりに中宮のおもと
　より上東門院にまゐりける
ゆけりけるへて別れのこゝろをなけきけり
さればへくしもあきの空さへ別れのこれは別れなりけり　小弁命婦

おなし年の冬御禊大嘗會なと過て十二月になりにけれは
大納言斉信二条院の二品内親王にまゐりて侍けるに遣しける
まちわひのまれにあふ事をさへさはりうき宮ゐの月よ　前中宮宣旨

返し

ありしよにそてのなみたの月かけをなくさめかたき人は　大納言斉信
きみかよにいのちのかへてなかめてもおもひやそらのかすみなりけむ
ぬりきそて猶つくしもえきえたえはつるらむ

一そらさの花はしめて朝日はしのふるそてのまつの雲の赤染衛門
恒徳公のきはにてそのまゝの事の中に侍ける
をきゝてよみ侍ける

年くれて春をまつへき身にしあれは花のなたかき　参議通信
上東門院にまゐりて侍けるに一条院の御ことをおもひいてゝ
さらにもあはれなる事を思ひやりて

思ひきやうき世の中にとまりゐてむかしの事をきくへしとは　赤染衛門
ゆきのうち
おもひしも今ひとたひもかはらぬは世のならひとやおもひなすらむ　上東門院

おなしく侍ける女房のもとへ宗輔のかくれにけるを
きのふまてありしかとも世はうき物を
おもひやる心はかりを侍けれはいまは命のをしきかな　源定基朝臣
とりかへて侍けるのち見侍けるに
いろいろのはなのなかめもいまはたゝ思ひそいつる人のいきを　平維康
右衛門督基忠かくれ侍りてのちよみ侍りける
花をみてむかしを思ふ袖のうへにちるはなみたの露にそありける　前中納言匡房
後三条院かくれさせ給ひて諒闇のころよみ侍ける
墨染の世にはすみそめのそてはかはきてぬれまさるらむ　参議家経
かなしさは時そともなく侍けれは月のさやけさにやみくらしけむ
国信中納言侍ける時大納言忠家かくれ侍りてのち宿の白中納言に
しら雪のふりにし跡をたつねてもなみたくもりて見えぬ月かな　権中納言俊忠

返し

あやめ草ひきもわかれてしるへなき袖のなみたにやとる月かけ　中納言国信
女のおもひにて侍ける頃人のとふらひ侍けれは

かりにのみ思ひし秋ぞと思へば人皆とまる袖のなみだかな　加賀左衛門

贈皇后宮かくれ給ひて後かの宮の前栽をみていと哀れにおぼえ侍ければ

りのはなをきつけくさもまた給ひける

むかしにはかはらぬ花のいろもなほ見るにぞ袖のつゆはまされる

おなじさまにうつりかはらぬ月をみておもひいづることの多かる

かはらぬは昔の月もかはりゆく人の心ぞ君をしのぶる　藤原有信朝臣

人のまうけける法師のもとにてよみけるに、哀れ給ひける八よ

みたりける

おなじ寺院の方へやまかりて侍りけるに、人のともにまかりて　慶範法師

待賢門院かくれさせ給ひて後、御はてのわざなどにまゐりて

侍ける月

みなもとのかはるみやこをたちかへりみむ

ひとつき

ちりぬるは別ればかりの身をうらみよそにながめし人のあはれさ　崇徳院御製

くもりなくうつれる月のかげをみてもわすれぬ人ぞこひしかりける　上西門院兵衛

こゝろなき草木も君をしたひてやけふのいろはかはりはてぬる

いかにしてしばしはかるべきわかれかは涙にくもる秋の夜の月　素覚法師

服ぬぎ侍ける時よみける

ふるさとはけふこそかはれ人のうへにありしにかはる衣をぞきる

墨染の衣はいつまでとおもひしに今は色さへかはりはてぬる　天台座主覚忠

さらにまた世をうぢ山のあはれさをいつかはしらむ君をたのみて　勝範

浮世にはまた日をうつしてみるものを梢のはなのちるぞかなしき　前参議教長

待賢門院の御服ぬぎ給ひけるを宮にて見侍りて

思ひきや浮世のほかにかはる身の今日はころもにうらみをぞそふ　左京大夫顕輔

中納言実家の家の母身まかりにける時

ときをまたぬ山のおくにもさらぬ身のつひのわかれをいかでしのばむ

まくらにもとゞめし宿のなごりとてわかれしあとの秋ぞかなしき　大炊御門右大臣

大納言公実身まかりて後、その忌の日よみける

くもゐにてかはらぬものとしりながら別れしあとのなごりをぞみる　前太政大臣

大炊御門の右大臣みまかりて又の年七月七日母の三位のもとへ

申しつかはしける

七夕はあふよもしらぬ旅人の袖にもこよひ露ぞかゝれる　権大納言実家

なし
桃園の露けき袖は七夕にかさねぬにつけくわやらん　三位右大臣母
待賢門院かくれさせ給てのち法金剛院にて御はてしける
右にれをかさりせは何る詠もむかしをこひくるの月　仁和寺入道法親王
二条院かくれさせ給てのちかのへの後よみ侍ける
はかなしや君か御幸のかくかけの月はひかりさすもの悲しさ　法印澄憲
大納言正門の右大臣かくれ侍りてのちのあはれ給ける秋紀
ともの給けるをきゝてよみ侍ける
別れにし人のなきこそ悲しけれあはれ世のなかのさえ尽しさ　右大臣
母の二位かくれてのち侍ける
重服山寺にこもりてはゝかりやなけれいと深かりし　民部卿成範
母の服よ侍ける比三位母かくれ給けるに同侍ける
服衣二年かさね着つ墨衣なみたをさへそかへるも　藤原貞憲朝臣
おもひやる袖の母かくれけるとき侍よめる
墨染のそてのうへに見ぬもかへす袖の別かなしき　右京大夫季経
仁和寺入道法親王かくれ給ての後いまさしはへる月をみ侍る

入あひのかねのおとをさそありしよを思ひや山のはにいつる月　俊恵法師
雨やのあはれ悔りて給けれは志のぬ涙もみなあはれみ
給されはよめる
跡ふかれはむかしの跡や涙なるらんその世しるへき君は思ひしも　左京大夫脩範
何事のはかなさにくるゝかなしみのつきの川をもひとしれすなかれて侍ける
何をかは思ひしるらん別れにしその川の水もなみたなりけれ　俊恵法師
花園のれた侍れ給よ幸ゆく給けるを聞はへる侍て返り
ちるをみし君にわかれし後の春はなにに世の人のよしとも見む　給けるに法印成慶
あはれやさくらの花の色はむかしの春にさへこそかはらさりけれ
うつりゆく時にまさりけるはかなさをよみ侍けるを
とめてもいまはたゝ鳥のなくねをもさそひつる秋なれは　法印静賢
さそひける春よりこそかはかなしけれしはしもとまらぬ花の色かな
同防卿も又同侍りけるを深くかなしむ思ひに
ともをのみてはいまは世に待るに
何ゆゑかいつれの年もひとりのみ暮にしまゝの秋の夕くれ　藤原親盛
仁和寺入道法親王かくれ給ける年の秋の夕

墓所に詣りけるに山に雲かゝりて心ほそく侍りけれはよめる

山のはにかゝれる雲やけさのまの煙のなこりなるらん　寂蓮法師

父の中納言顕長か墓所の雲林院の里に侍りけるに

まかりてよめる

年ふともこひしきを母かきのこゝろにつけてさこそなけかめ　法眼長真

母の身まかりにける時よめる

あちるやと海りて鐘をきゝしらぬ今はかりの世は八　登蓮法師

同行にて侍りける西住秋の比わつらふ事ありてかきりになりにけるをみて

侍りけるによめる

もろともに眺なかめて秋の月ひとりにならんことそかなしき　円位法師

西住法師身まかりける時正念たかはすなりけるよしきゝて

円位法師の許に申しつかはしける

乱れすとをはりきくこそうれしけれさても別はなくさまねとも　寂然法師

返し

この世にて又あふましきかなしさにすゝめし人そ心みたれし　円位法師

千載和歌集巻第十

賀哥

みこにおはしましける時まつりことせさせ給へりけるに

八条院内親王とまうしける時のはしめてまいらせ給ひける

と侍せてまいりけるに詠せさせける

かせに行さりきる宮行や君かよろつ世のはしめなるらん　院御製

載てかゝる難行のふるきにならふ御行に

ちとりして君か代の始行八千代まてのうけとそふらん　後三条内大臣

祝の心をよみ侍りける

君か代は天のかく山いつる日のてらさん限はつきしとそおもふ　皇太后宮大夫俊成

堀川院の御時大嘗会の御禊の心をよみ侍りける　八条入道太政大臣

春くるあたつかはとなかれ水にたつやちとせのかけをうつさん　大炊御門右大臣

わかしき御時花のえのかて花契待のはるのあけほのとよろつまつりきるにも申させたりける　源俊頼朝臣

ちとせまて折てみるへき桜花梢はるかに咲初にけり　堀河院御製

鳥羽院にておりゐさせ給て後庭の花久しといふ心を
られつゝまつりける時詠侍ける

をり植し君か桜の咲花は八千年まて限らぬ匂ひなりけり　大納言忠教

堀河院御時鳥羽殿に行幸ありて池上花といふ心をよませ給けるに

千年すむ池の汀の八重桜かけさへ底にふかく見えける　権中納言通俊

白河院鳥羽殿におはしましける時松契久しといふ心を詠る

[illegible]代より久しかるへき君か代は松の緑もさそ思ふらん　後二条関白内大臣

宇治前太政大臣の家にて松を祝といふ心をよめる

のにとよみ侍ける

[illegible]らさへ[illegible]河のほとりの[illegible]波の千代の数かな

二条太皇太后宮賀茂の社へまうて給ける時東院おとゝ松枝を

みせてよみ侍ける

あきらけく[illegible]の[illegible]河松とてやそてかけて[illegible]山へき　前太政大臣

堀河院の御時百首の歌たてまつりける時子日の心をよめる

[illegible]と[illegible]君か代の[illegible]　皇太后宮大夫俊成

祝の心をよめる

貞山の中河とよ[illegible]法[illegible]世にて[illegible]すらん　右衛門督季能

保延三年法金剛院に行幸ありて菊契多秋といふ心を詠侍ける

君か代[illegible]月かしこ[illegible]て此[illegible]世の志[illegible]らん　法性寺入道前太政大臣

今日菊[illegible]よ[illegible]しき[illegible]千年の[illegible]といふへしとは　花園左大臣

おくやまの[illegible]世のとしく[illegible]のを志らさく此花　八条前太政大臣

百首の歌めしける時祝の心をよませ給ける

吹風も本の枝をならさねは山たえてし[illegible]ゆる　崇徳院御製

二条院御時大内にてよませ給ける

松をとはせ[illegible]御[illegible]花[illegible]ならす　花山院前太政大臣

千世[illegible]神代[illegible]わか[illegible]桜かな

人の[illegible]百首の歌[illegible]時祝の心をよませ給ける　左大臣

[illegible]世のわかのうらかな

百首の歌詠ける時の祝の歌

[illegible]千世のたゝ山の[illegible]　式子内親王

[illegible]時百首の歌よませ給ける祝の歌　二条院讃岐

五首歌よみ侍りける時よめる

百ちたひうら島の子ハかへるともはこやの山ハときはなるへし　皇太后宮大夫俊成

二条院の御時あかいの内門大臣の門裏に侍けるに
花のまへに松の色ふかしといふ心を人々つかうまつりけるに

君か世ハ限りもあらしみかさ山みねにあさ日のさゝむかきりハ　大炊御門右大臣

閑院の東にはしめて對松争齢といふ心をよみ侍ける

千年ふる尾上の小松うつし植て万代まての友とこそ見め　入道前関白太政大臣

万世も山へき宿なれハつまと八松にそやとりける　源通能朝臣

二条院の御時内裏にてまいりけるに人々の歌に万歳

楽しきを世に侍けるとみゆるかな雲ゐの白妙房の御門に

入道前太政大臣中院の家にて侍りける時祝の心を讀

いくとせかすむへき宿の千年にてさかへむ池の

橘俊綱の伏見の家にて

みかさ山さしてそ来つる八月の

後冷泉院の御時の大嘗会の時叙位のとをよめる

君か代ハいく千とせともかきらしな松山のまつの数ハかそへし　藤原孝善

後一条院の御時長和五年大嘗会主基方の屏風に備中国

吉備の中山の麓よりひさかたの空にとよめる　善滋為政朝臣

万世のこゑとそきこゆる吉備の中山のみね

白河院の御時承保元年大嘗会主基方備中国の屏風

思ふ事とよめる

ちとせやふる神田の里のいねもつきすの月日を重ねへしとも　前中納言匡房

近衛院の御時康治元年大嘗会悠紀方風俗歌に

ときはなる松の木かけにたちよりて千年をすくる杉の森　左京大夫顕輔

同御時大嘗会主基方備中国の浦とよめる

君か代の数をしれハちとせの千ゐの浜まさこ

同御時大嘗会主基方備前国吉田村とよめる

わか君ハちよのかすしらぬ八千年の松と契けり　刑部卿範兼

六条院の御時仁安三年大嘗会悠紀方の屏風の歌

君か世のかきりハあらし世の中をまもる山の関の杉　宮内卿永範

今上の御時元暦元年大嘗会悠紀方風俗の哥三上
の山をよめる
ときはなるみかみの山の杉むらや八百万代のしるしなるらん
藤原季經
朝臣